

## フォトアルバムが育児に与える影響に関する検討

こざき やすひろ\*・きと かえで\*\*・いしだ ふみや\*\*\*  
小崎 恭弘\*・城戸 楓\*\*・石田 文弥\*\*\*

\*家政教育講座・\*\*教員養成開発連携センター・\*\*\*教育学研究科家政教育専攻

(平成28年8月31日 受付)

様々な技術が発展した現代において写真撮影はその手段、保存ともに容易で身近なものとなっている。子育てにおいても写真撮影やアルバム作成といった行為は行われてきたが、写真を撮り、アルバムを作成することが育児に対してどのような影響があるのかは研究されていなかった。そこで家庭環境や家族の形態が変化した現代において、写真撮影が育児や保護者に与える影響について検討を行った。この結果、多くの家庭で、写真を撮影する機会は多数あるが、写真を現像したり、現像アルバムを所持している家庭は少数であった。一方でアルバムを作成している家庭においては、子育てに対して肯定的感情を持つ家庭ほど、より多くの写真アルバムを制作していた。この結果は、アルバムの作成が子育て・家庭環境にとって良い影響を与えている可能性を示唆している。

キーワード: 子育て, 子どもへの愛着, 家族関係, 写真アルバム

### I はじめに

デジタルカメラやスマートフォンによって、写真をデジタルデータデータとして撮影する手法が普及するようになって以降、「写真を撮る」という行為はそれまでに比べてより容易で身近なものとなった。しかし写真を撮る、残すとといった行為と、それらの主体となる家族や子育ての間にどのような影響があるのかについて包括的に研究したものはない。よって本研究では、その初めとして、子育て時期の家族とアルバムに関する検討を行うことを目的とした。

アナログフィルムが主流であった時代において、写真を撮影する際にはフィルムが必要であり、現像する際に写真店に依頼しなければならなかった。こうした写真撮影に際する手間によって、写真を撮る・アルバムに残すとといった行為は、非日常的で特別なものになっていたと考えられる。このため写真は、子供の記念となるような節目節目の行事、いわゆるハレの日の記録という意味合いが強かったと言える。

しかし、デジタルカメラや家庭用印刷機の普及によって、写真を撮影するためのフィルムを準備する必要や、それまで専門店に依頼しなければならなかった現像も各家庭で比較的容易に行うことが可能となった。写真撮影に際する手間が少なくなったことによって、写真を大量に撮ることができるようになり、それまで写真が持っていたハレの日の記念や記録という特別なものとしての意味が薄れ、一つ一つの写真に対する思い入れも低下している可能性が考えられる。このことは、写真によって生まれていた家族の思い出の形成や、子どもへの愛着にも影響を与えるかもしれない。

写真を取り巻く環境が変化していく中で、どのようにして写真と関わっていくことが家族関係や育児に対して良い影響を与えるのかを考える必要がある。よって本研究では、まず初めに、子育て時期の両親がどのような写真を撮影し、保存しているのかを包括的に調査した。

また写真と子育てとの関連を考える上で、現代における育児環境の変化についても考える必要がある。まず初めに、「イクメン」という言葉に代表されるように、それまで育児の主体であった女性から、男性の参加が望まれるようになったという点が挙げられる。内閣府男女共同参画局 [1] による男女共同参画白書では、共

働き世帯が増加し（図1参照）、家族内での役割分担や就業の関係から特定の人のみが行うものではないというものとなった。育児の環境の変化に関する、もう一つの点は少子化である。子ども人口の低下と子どもがいる家庭における一人っ子割合の増加によって、保護者が育児を行う際にそれまでに比べてより手間をかけることができるようになったと言える。

こうした育児環境の変化は、より育児に対する余裕を与える可能性を示唆しており、こうした余裕は写真撮影などを含めた子育てに必須ではない子育てに関する愛情表現的行為を行う可能性を増大させる可能性が指摘されている[2]。またこの時、写真を撮る・残すといった行為そのものが、子どもへの愛着に正の影響があるのであれば、より子育てに関するポジティブな感情や愛着が強化されるという正のループを引き起こすであろう。

以上のことから、本研究ではアルバムと育児意識との関係性を明らかにし、アルバムが育児を行う上でどのような意味を持っているのか、またどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。

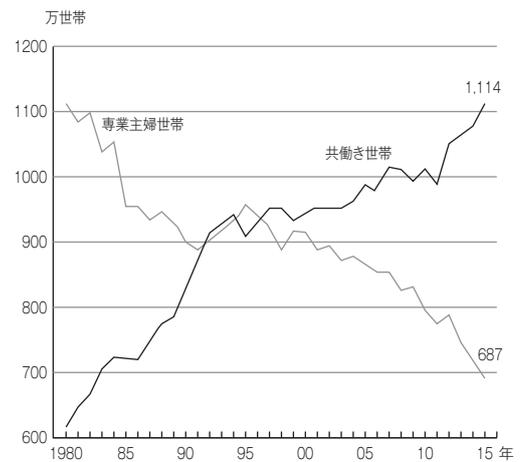


図1 専業主婦世帯と共働き世帯

## II 方法

### 1. 調査対象者

K府の育児講演会の参加者に対してアンケート用紙を配布し任意で回答をしてもらった。回収は153部、回収率は51.0%であった。このうち、回答数が設問数の半数に満たない回答を除外した146名（女性132名、男性14名、平均年齢42.6歳）を分析対象とした。また分析対象者の子どもの数は1人から5人（平均2.23人）で、子どもの年齢は1歳から27歳（平均11.21歳）であった。また分析対象者のうち、77.4%にあたる113名が仕事を持っていた。

### 2. 調査紙

写真と育児に関する先行研究がないため、まず体系的に写真に関する現状を把握するために、著者らによって、写真とアルバムに関する現状を明らかにするための設問が作成された（添付資料参照）。加えて、子育ておよび愛着に関する尺度として、高橋・園田[3]の愛着に関する尺度を改変して利用した。

## III 結果

まず初めに、子育てに際した写真撮影及び保存に関する現状を理解するために、各質問項目に関する全体の回答傾向を示す。

### 1. 写真を撮る際の使用機器割合（表1参照）

写真を撮るときに使うツールとして、「よく使う」と回答したものは「スマホ」と回答した人が最も多く全体の50%を占めた。ついで、デジカメ及びデジタル一眼が多かった。タブレット（5%）は持ち運びに際して大型であるために撮影という点で避けられたと考えられ、ガラケー（4%）は所有者が少なかったために選ばれなかったと考えられる。またフィルムカメラや一眼レフなど、アナログ機器を使用すると回答した者はいなかった。

表1 写真を撮る際の使用する機器  
回答数（人）と割合（%）

使用機器	回答数	割合
スマホ	71	50%
デジカメ	42	30%
デジタル一眼	16	11%
タブレット	7	5%
ガラケー	6	4%

2. 撮影データを現像するか (表2,図2参照)

回答者の69%が写真の現像をしておらず、写真を撮ることがあっても、その後の保存はデータでしか行っていないことが分かる。つまり写真自体を現像することがないこと、さらに紙媒体でのアルバム作成もあまり活発には行われていないものと思われる。

現像しているかどうかを、機器毎に比較した場合、撮影したデータの現像については、最も撮影機会の多かった「スマホ」よりも「デジカメ」の方が多かった。これについては、スマートフォンでいつでも気軽に撮影出来るという状況が、子どもの成長の記録という点での写真の価値を引き下げてしまった可能性が考えられる。

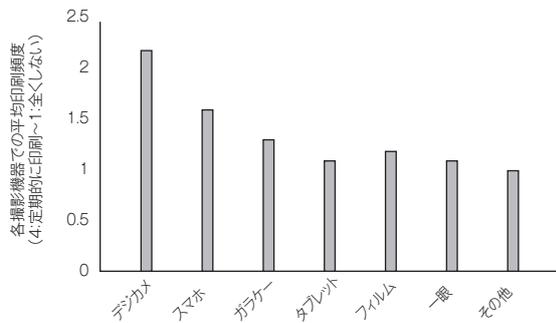


表2 アルバムを作成している頻度  
回答数(人)と割合(%)

頻度	回答数	割合
定期的	35	5
その都度	21	3
時々	175	24
していない	504	69

図2 撮影機器毎の現像頻度

3. 写真に現像している理由 (表3参照)

写真を現像している理由としては、「子どもの記録」「家族の思い出」と回答する割合が高く、記録媒体としての面を重視していると考えられる。いつでも見ることができるという回答が少なかったのは、データ媒体であっても、その利点が失われることはないからであると思われる。

表3 写真を現像している理由  
回答数(人)と割合(%)

	回答数(人)と割合(%)	
	人数	割合
子どもの記録	32	26
家族の思い出	29	23
後で見る	26	21
写真が好き	13	10
いつでも見れる	10	8
していない	1	1

4. 家庭のアルバム所持数 (表4参照)

アルバムが無いと回答した人が、半数以上いることから、アルバムを作成する習慣が近年薄れて言っているのではないと思われる。

一方で、10冊以上アルバムを所持していると回答している家庭もあり、作成に対して熱心な家庭も存在していることがわかる。

「2~4冊」という回答した保護者も比較的回答者がいるが、これは子育ての限定的な期間だけ写真を撮り、アルバム作りを行っていたためではないと思われる。

表4 家庭のアルバム所持数  
回答数(人)と割合(%)

冊数	回答数(人)と割合(%)	
	回答数	割合
ない	333	52
1冊	71	11
2-4冊	122	19
5-9冊	48	8
10-14冊	29	5
15-19冊	19	3
20冊以上	17	3

### 5. アルバム所持数内訳（表5参照）

最も多いのは「子ども」のアルバムであり、育児を行う中で写真を撮ることが多いのではないかと考えられる。次いで「夫婦」のアルバムという回答が得られたが、これは子育てと同様結婚式などの記念行事のものではないかと思われる。

上位3項目のうち子どもと夫婦について特に回答数が多くなっているが、家族という項目にはこの二つが含まれる。この質問において項目の定義を明確にしなかったために、こうした結果になったのではないかと思われる。

表5 アルバムの所持数内訳  
回答数（人）と割合（%）

種別	回答数	割合
子ども	113	37
夫婦	96	31
家族	77	25
趣味	10	3
定めていない	10	3

### 6. アルバムに張っている写真の内訳「たくさん・ある程度」のみの頻度（表6参照）

回答の割合が最も項目は、「家庭行事」であり、最も割合が低かったのは「家族集合」であった。回答割合が半数以下であった項目は、撮影者である保護者も映る必要がある項目である。この場合写真を撮影してくれる関係者や第三者もしくはツールが必要となるために、回答数が少ないのではないかと考えられる。写真を撮ることが容易になっているのに対して、「日常」の写真という項目の回答が比較的少ないのは、撮影することと現像することがセットの行動ではないということを示唆している。

表6 アルバムに貼ってある写真内訳  
回答数（人）と割合（%）

	回答数	割合
家庭行事	105	77
園行事	98	72
発表会	93	70
旅行	93	70
表情	93	69
日常	83	61
楽しい姿	79	59
外出	76	58
親子	57	42
家族集合	55	41

### 7. 育児に関する意識（図3参照）

中央値2に対して、育児の二面性である「楽しさ」と「大変さ」のそれぞれがこの結果に表れている。全ての項目において半数以上の回答傾向が見られ、この二面性は常に成立するものであり、相反する感情が存在する矛盾のなかで育児が行われていることがわかる。これらの感情は、環境を含め生活や子ども、夫婦といった家族環境に影響を受けて変化する。これらの感情もまた、育児に対する思いや育児に関連した行動へ影響を与えるものと思われる。

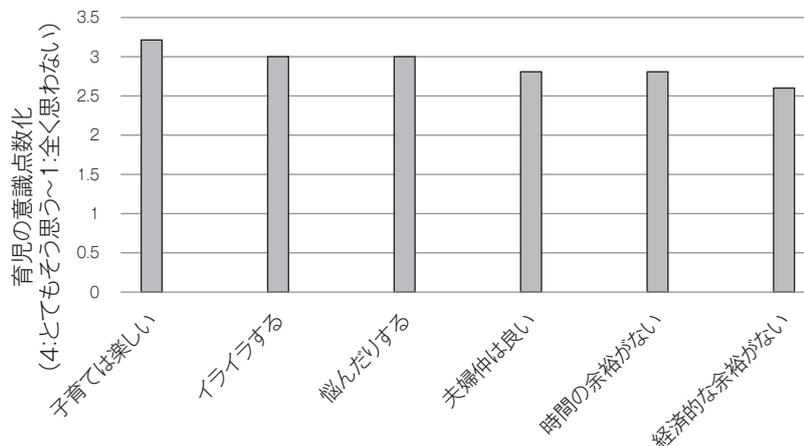


図3 育児に対する意識

8. 家族関係・育児について (表7参照)

設問10「育児について」に関して因子分析を行い、育児に対する状態の把握を行った。因子分析には最尤推定方法を用い、スクリープロットの減退状況および、因子固有値1を基準として因子数を決定した。次に、因子固有値1を超える3因子を基準として再度、最尤推定法、プロマックス回転による因子分析を行った。この結果、因子負荷量0.3を基準として3因子6項目が抽出された。

抽出された因子はそれぞれ、F1:「育児にイライラすることがある」「育児に悩んだりすることがある」、F2:「育児は楽しいと思う」「夫婦仲が良いと思う」、F3:「生活に時間的な余裕がない」「生活に経済的な余裕がない」、であった。よって各因子はそれぞれ、「育児上の悩み (F1)」、「家族関係の良好さ (F2)」、「生活上の余裕 (F3)」とした。

設問の中央値2.5に対して、全体の平均点はそれぞれ、育児上の悩み (1.99)、家族関係の良好さ (3.02)、生活上の余裕 (2.31) であった。以上から、アンケートに回答した全体の傾向として、育児上の悩みは小さく、家族関係は概ね良好であり、生活上の余裕をやや持っている可能性があるといえる。

表7 家族関係・育児について

N=100		因子負荷量			
アイテム		I	II	III	
Factor I	子育て上の悩み				
	3 子育てに悩んだりすることがある	1.03	0.07	-0.03	
	2 子育てにイライラすることがある	0.49	-0.15	0.02	
Factor II	家族関係の良好さ				
	1 子育ては楽しいと思う	0.06	1.04	0.14	
	4 夫婦仲が良いと思う	0.09	0.31	-0.27	
Factor III	生活上の余裕				
	5 生活に時間的な余裕がない	-0.03	0.14	1.04	
	6 生活に経済的な余裕がない	0.11	-0.11	0.33	
因子負荷量 (SS)		1.33	1.27	1.24	
因子寄与率		0.22	0.21	0.21	
累積寄与率		0.22	0.43	0.64	
因子間相関		I	II	III	
		I	1.00		
		II	0.36	1.00	
		III	-0.35	-0.27	1.00

次に、子育てに対して肯定的かどうかによってアルバムの作成数が異なるかを検討するために、子育てに関する3因子の内、因子1:子育て上の悩み、および因子2:家族関係の良好さについて、各回答者の平均得点を算出し、それぞれ得点によってグループ化した。この結果、この設問での有効回答数は149で、これを因子1および2の平均得点が高い回答者から順に3つの群 (ポジティブ群50名、ニュートラル群49名、ネガティブ群50名) に分けた。各群における平均アルバム所持数は図4の通りである。また、それぞれのアルバムの種別 (夫婦、子ども、家族、趣味、定めていない) ごとに、被験者間の一元配置分散分析 (ポジティブ群、ニュートラル群、ネガティブ群) を行ったところ、子どものアルバム冊数で有意傾向の主効果が見られ ( $F(2,132) = 2.99, p < .1, p\eta = 0.05$ )、家族のアルバム冊数で有意な主効果が見られた ( $F(2,134) = 3.21, p < .05, p\eta = 0.05$ )。その他のアルバム冊数では主効果に有意な差は見られなかった (夫婦:  $F(2,135) = 1.06, n.s.$ , 趣味:  $F(2,129) = 1.11, n.s.$ , 定めていない:  $F(2,88) = 0.12, n.s.$ )。子どもと家族において、主効果が有意および有意傾向であったために、多重比較 (シェイファーの修正ボンフェローニ法) を行った結果、子どもの写真のアルバム冊数では、子育てにポジティブな群の方がニュートラルな群よりもアルバムを多く所持している傾向にあり ( $p < .1$ )、家族写真のアルバム冊数では、子育てにポジティブな群の方がネガティブな群よりもアルバムを多く所持していた ( $p < .05$ )。このことから、子育てによりポジティブな親は、写真を実際に現像し、アルバムとしてより多く保存していることがわかる。

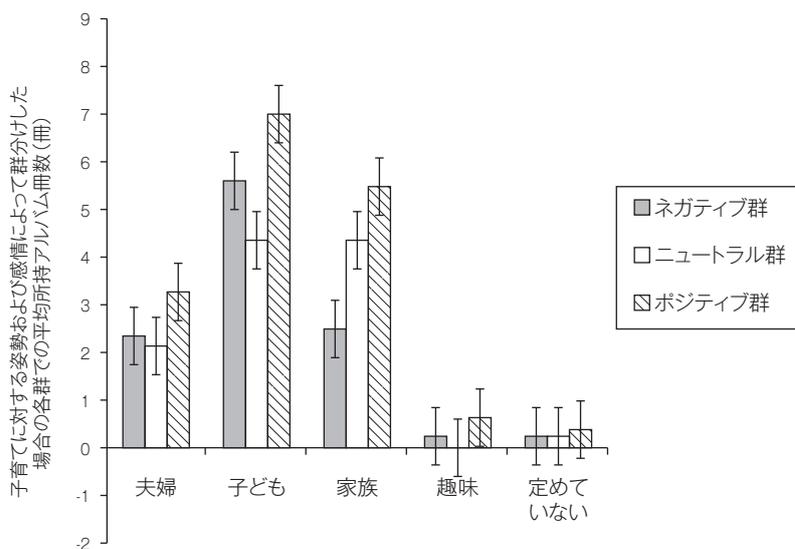


図4 子育てに関するイメージによってグループ化した際の、各グループの所有アルバム冊数 エラーバーは標準誤差を示す。

## 9. 家族関係・育児と写真・アルバムとの関係

8. で示した設問の各因子について、育児や家族関係に写真撮影やアルバムの作成がどのような影響を与えるのかを明らかにするために、写真・アルバムに関する量的変数を持つ設問を独立変数、「育児上の悩み」「家族関係の良好さ」「生活上の余裕」の3因子をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った（表8参照）。

この結果（表8参照）、育児上の悩みには「写真の現像（設問3）」と「育児

の写真をアルバムに張り付ける（設問7）」が負の影響力を持っていた。これらのことは、撮影した写真を現像すること、アルバムを作成する行為が育児上の悩みを軽減する可能性を示唆している。

次に家族関係の良好さには、「写真の撮影頻度」と、「写真のデータを見る頻度」が正の影響力を持っていた。これらの結果は、家族で写真を撮ったり、撮影した写真を見たりする行為そのものが、家族関係を良好にしていることを示唆している。

生活上の余裕という点については、「家族のアルバムの冊数」「趣味のアルバムの冊数」がそれぞれ正の影響力を持っていた。これは家族や趣味に関するアルバムを作成すること、並びに保存することが生活上の余裕のなさを消してくれる可能性を示唆している。上記のことより、写真を撮影すること、アルバムとして撮影した写真を保存すること、アルバムとして残した写真を家族で見るとは、それぞれ育児や家族関係、生活の異なる側面において良い影響を与える可能性が示唆されている。

## IV 考察

技術の進歩とともに、子育てに関連する写真撮影を取り巻く環境は大きく変化している。その中で、デジタル写真を撮影する、あるいは現像して保管するアルバムの作成が、子育てや家族関係にどのような影響があるのかを検討した。

結果として、まず初めに、写真を撮影する媒体としてはスマートフォンが最も選ばれているのに対して、撮影した写真を現像する媒体としてはデジタルカメラが最も多く選ばれていることがわかった。この結果は、スマートフォンでの撮影が、より容易になってしまったが故に、写真という記録としての付加価値を逆に引き下げている可能性を示唆していた。こうした現象と同様に、元来写真撮影が持っていた、子どもの節目ごとの記念としての「ハレの日」の記録という希少性が、簡便さによって薄れてしまっているかもしれない。

次に、撮影された写真は、多くの家庭で現像されない、つまり紙媒体としてのアルバム作成が行われないう現状が明らかにされた。しかしアルバムを作る家庭をそれぞれ子育てに対する姿勢（ポジティブ・ニュートラル・ネガティブ）で分けた群別の分析では、子育てに対して肯定的なイメージを持つ家庭ほど、子どもや家族のアルバムを保有していることが分かった。こうした結果は、紙媒体としてのアルバムが家族関係や子育てに対してポジティブな関係性を持っていることを表しており、ただ単に写真を撮影することとは異なる意味合いを持っていることを指し示している。

最後に、子育て上の悩みや家族関係の良好さ、生活上の余裕の3因子について、それらと写真・アルバムとの関連を検討した重回帰分析から、各因子について以下のことが明らかとなった。

まず「子育て上の悩み」では、写真を現像したり、子どもの写真を貼り付けたりする家庭ほど子育て上

表8 家族関係・育児と写真アルバムとの関係

設問	独立変数	子育て上の悩み	家族関係の良好さ	生活上の余裕
設問1	撮影頻度	-0.06	0.19 *	0.05
設問2	写真屋での撮影経験	-0.01	0.00	-0.04
設問3	写真の現像	-0.18 +	0.01	-0.16
設問4	デジタルズームの印刷	0.03	-0.04	0.07
設問6	夫婦のアルバム	-0.04	0.07	-0.02
設問6	子どものアルバム	0.02	0.00	-0.04
設問6	家族のアルバム	0.03	0.05	0.08 +
設問6	趣味のアルバム	0.00	0.08	0.15 +
設問7	家族との子ども写真を張付	-0.05	0.10	-0.15
設問7	子どもの写真を張付	-0.17 +	-0.06	0.11
設問8	写真データを見る頻度	0.00	0.11 +	0.07
決定係数 (R <sup>2</sup> )		0.10	0.21	0.21
補正R <sup>2</sup>		0.00	0.13	0.13

\*:p<.05, +:p<.1

の悩みが小さくなる傾向が見られた。このことは、子育てに悩んでいる親ほど、写真を撮った後に、写真を現像する、あるいはアルバムを作るという、子どもを振り返る行為を嫌う可能性を示す一方、写真を現像してアルバムを作るという行為そのものが、子どもへの愛着を増大させている可能性を示唆している。

次に「家族関係の良好さ」については、写真を撮ったり、見たりする頻度が高いほど家族関係が良好である傾向が見られた。このことは、写真を撮ることも一定の家族関係での良好さを増大させる可能性があるとともに、写真のデータを見るという子育てや子どもへの振り返り行為の重要性を物語っていると言える。

最後に、「生活上の余裕」では、家族や趣味のアルバムの冊数が多いほど、生活上の余裕があることが分かった。これは、生活上の余裕がある家庭ほど、そうしたアルバムを作る環境にあることを指し示していると言える。

育児は様々な思いや価値観が入り混じって行われる総合的な活動である。育児に関わる人がどのような環境に置かれているかと言った日常生活状況によって、親子の関わりは大きく影響される。子どもの写真を撮ることやアルバムを作成することなど、育児に必須ではない活動が、保護者に様々な影響を与え、親子の関係をより深いものとするのではないかと考えられる。

## V 今後の課題

今回の研究はあくまでも探索的な意味合いが大きく、調査地域も限定されたものであった。我が国においては、写真およびアルバムに関する研究というものがほとんど行われておらず、定義や言葉の意味などが明確にされていない。質問項目の精査、並びに調査地域の拡大が必要になると考えられる。質問項目については使用している用語の定義や意味合いがこちらの想定と回答者の間で捉え方の相違が存在すると思われる。次回調査の時点では、機器の選定、地域の拡大、また調査対象の変更・拡大を行いより精度の高い調査を行う必要があると言える。

## 引用・参考文献

- [1] 内閣府男女共同参画局 男女共同参画白書  
(2015) [http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h26/zentai/html/honpen/bl\\_s00\\_02.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/html/honpen/bl_s00_02.html)  
2016/8/8 アクセス
- [2] 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 (1996) 「子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について」『発達心理学研究』7 (1) p.31-40
- [3] 高橋道子・園田陽子 (2008) 「育児への肯定的感情にソーシャル・サポートが与える影響」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系 Vol.59 p.171-181

## An Influence for Childcare by Making Photo-album

KOZAKI, Yasuhiro\*, KIDO, Kaede\*\* and ISHIDA, Fumiya\*\*\*

*\* Home Economics Education, \*\* Center for Cooperative Teacher Training Development,**\*\*\* Home Economics Education Graduate School of Education*

In our modern age in which diverse technologies have evolved, taking and storing photos has become easier and more routine. People have always taken photos and made albums of their children growing up but there has not been any research on the effects of creating these albums on childcare. Consequently, we investigated the effects of taking photos on childcare and parents/guardians in this modern age of changed family environment and composition. The results showed that there were many opportunities to take photos for most families but that there were few families who actually developed photos or had photo albums. Meanwhile, among families who had created albums, the more the family had positive feelings towards bringing up children, the more photo albums they produced. These results suggest that creating albums has the potential to have a good effect on bringing up children and the family environment.

**Key words :** bringing up children, love for children, family relationships, photo album